

タスクを中心とした英語コミュニケーション授業

—学生の学習意欲を高める授業を目指して—

ベー・シュウキー

長崎大学言語教育研究センター

Task-based English Communicative Class: Focusing on How to Increase Student Motivation in the Classroom

Siewkee BEH

Center for Language Studies, Nagasaki University

Abstract

The main purpose of this paper is to examine an effective way to increase student motivation in the classroom. First, this paper gives a brief introduction of the problematic English Education in Japan, and explains the importance of increasing student motivation in the classroom. Second, this paper describes and analyzes the design, implementation and the effect of an unfocused task on an English communicative class. Lastly, my conclusion suggests that increasing student motivation and participation in the class would be an effective way to enhance autonomy, which is essential for studying a foreign language.

Key Words: motivation, task-based approach, active learning

1. はじめに

日本では、例えば中学校から大学2年まで8年も英語を学んだのに、話すことさえできない、という言葉がよく聞かれる。しかし、日本の外国語の学習指導要領をみると、1990年代初めにはすでにコミュニケーションという文字が登場していた。それだけでなく、文部科学省が2002年から世論の高まりに応じて実施した『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』といった英語教育改革に関する具体的な施策でも、英語でコミュニケーションができる人材の育成について触れていた。現在の日

本の英語教育は、小学校から大学まで、すべて英語によるコミュニケーション能力¹の育成を重要な目標の一つとしている。しかし、このように約 20 年間、強調され続けているにもかかわらず、依然、冒頭のような言葉が使われ続けている。なぜ 8 年も英語を学んだのに、英語を話すことさえできないのか。これにはもちろん、様々な要因がある。まず 1 つめとして、言語的な面からみれば、日本語の文法や発音と英語のそれには大きな違いがあり、英語を学ぶことは日本人にとってとても不利な面がある。また日本の学生が英語を話す際に、しばしばカタカナ語の影響を受けた発音をしてしまうことも、理想的な発音を難しくする要因の一つである。2 つめに、英語の練習や接触の機会が乏しいことがある。よく知られているように、英語を聞いたり話したりできるかどうかは、大量に聞き話す練習ができるかどうかにかかっている。日本の英語教育は戦後から読むことと書くことに偏っており、こうした状況は改善されてきてはいるが、十分とはいえない。加えて日本の生活環境においては、英語の環境に浸るといったことは難しく、英語学習者が英語を実際に聞いたり話したりする機会はとても少ない状況であった。3 つめに、学生の学習への動機づけ (motivation) が低いことがあげられる。日本における英語は外国語としての英語であり、日常的に英語でコミュニケーションをとり、生活で使用しているマレーシアやシンガポール、インドといった第二言語あるいは公用語としての英語を学んでいる国とは大きな違いがある。また中国や台湾、韓国といった他の東アジア地域に比べても、英語の仕事上の必要性や昇進との関連も高くはなく、日本の学生の英語学習への動機づけは明らかに低いといえることができる。この学習への動機づけの高低は、大学でのアクティブ・ラーニングや授業外の学習の自律性 (autonomy) に大きく影響を与えるものである。

ここまで述べてきた 3 つの要因のうち、1 つめと 2 つめは変えることが難しい部分ではあるが、文部科学省は近年も積極的な改革を行っており、発音とコミュニケーション能力の育成を重視 (例えば、音声を重視する小学校外国語活動を導入したり、高校の授業を原則として英語のみで行うよう決めたりしたことなど) するようになり、発音の改善や、話したり聞いたりする量の増加が期待できる。そして、3 つめの要素こそが、学生の興味と意欲を向上させるよう計画された授業を通じて改善が期待できるものと考えられる。

本稿では、英語学習における学習への動機づけの重要性について説明し、タスク (task) の完成をカリキュラムの中心におく教育方法がいかに学生の学習への動機づけを高め、アクティブ・ラーニングの効果を上げるかについて紹介する。加えて、その教育活動において注意すべきことを具体的に述べることにする。

2. 先行研究

Garner (1985), Garner & Lambert (1972) によれば、動機づけは短期的な努力

によるもので長期的には続かないもの (**instrumental motivation**) と、比較的長期にわたって努力を続けるもの (**integrative motivation**) に分けられる。

前者は個人的な成功を目的とし、成功（例えば、仕事をうまくこなす、入学試験に合格する）に到達するために、学習者は目標言語 (**target language**) 自身、目標言語を話す人、あるいは目標言語を話す人の文化的背景や関心について知らなくても、成功という目的に達することができる。後者は、それとは反対に、学習者は目標言語にとっても関心を持ち、目標言語を話す人の文化に関心を持ち、行動し、時にはその人達のグループに入りたいと願っている。大学の授業としてはもちろん長期的な関心が継続することが理想的である。そのためには、それぞれの授業で十分なカリキュラム設計が必要となる。

それでは、いったい学習への動機づけは言語学習にどのような影響を与えるのであろうか。よく知られているように、言語の学習は多くの時間と精力を費やす必要があり、もし学習への動機づけがそれほど高くなければ、大部分の学生については試験が終わった後も動機を持ち続けることは期待できない。現在の日本の大学入試では話すことを求められることは非常に少なく、英語でコミュニケーションできるようになれるかどうかは、個人の不断の努力にかかっている。

では、どのような力が人を不断の努力へと導くのであろうか。やはりそれは学生が授業で面白いと感じることが、学習を継続させる 1 つの有効な方法であると思われる。Dornyei & Ushioda (2001) によれば、学生が教室で教わっている内容に価値があると思えば、その学習への動機づけは高くなる。学生が価値があると判断する根拠は、学生自身が面白いと思ったかどうかであり、それは基本的に学生自身が判断している。よって、近年の英語教育教材は学生の興味を引くものとなっており、関心のあるテーマと学生の将来がマッチするような内容設計がなされている。そして後に触れるタスクベースドアプローチ (**task-based approach**) は、教室を現実生活の場面に近づけることができるものである。

3. 方法と実践

タスクとは何か？タスクのもともとの意味は「仕事、作業」であるが、外国語あるいは第二言語学習の場合、その意味は異なっている。Nunan (1989) によれば、いわゆるタスクとは意味のある中心的活動であり、学習者に目標言語への接近と理解、処理、アウトプットと相互作用をつくりだすものである。この過程において、学習者は、言語の形式ではなく、主に語意に集中するようになる。高島 (2005 年) の整理によればタスクは2つに分けられる。**unfocused task**、つまり、活動時に使用する文法構造が予め特定されていない場合、学習者は既習の文法、語彙を自由に駆使して活動をおこなう。言い換えれば、メッセージに焦点を当てた (**message-focused**) 活動

と考えてよい。これに対して、**focused task** は、特定の文法構造を使用することを狙って作成されているものである。以下は筆者が実際に教室で使用している **unfocused task (message-focused)** の実践の一例である。授業は大学1年生の「英語コミュニケーション」であり、受講生は48人で英語のレベル分けをしていないクラスでの実践である。

タスクの構成

3.1 ねらい

3.1.1 調べ活動

いろいろな業種や職名の言い方を知ることができる。

3.1.2 英語での履歴書の作り方、面接時の質問と会話の練習

簡単な英語の履歴書を作ることができる。

英語で面接するときの説明・質問・応答などができる。

英語で自分の長所と短所を言える。

3.1.3 比較

日本語の求人と英語の求人の違いに気付く。

3.2 タスクのイメージ

3.2.1 会社作り（一回目の授業）

- ・前回の授業の最後にグループ分けをして、興味のある業種や職名の言い方について調べてくる指示と、その分野に近い求人広告を新聞、雑誌、フリーペーパー或いはインターネットで調べてくる課題を出しておく。
- ・4人で一つの会社をつくる、調べた課題から4人が一緒に作りたい会社を決めて、会社の名前、募集したい職種や条件について考えて、配られた白紙に求人広告を書く（イラストをつけたいグループは家で仕上げをしてくる）。
- ・簡単に口頭で自分の会社を紹介する三つの文を作る（提出して、教員が添削する）。
- ・面接に来る人の性格や能力を見極める質問を10個作る（提出して、教員が添削する）。

3.2.2 面接の本番（二、三回目の授業）

本番の日（二回目の授業）に一つの会社に2人の面接官が同時に且つ個別に面接できるように、デスクとイスを向かい合わせて座れるように用意する。

一つの会社につき2人のメンバーが面接官を演じる、残りの2人は求職者を演じる。まず求職者役の学生は自分がワードでつくってきた英語の履歴書（前回の

授業の宿題)とタスクシート(サンプルの会話が提示してある)を持って、各会社の前に置いている求人広告を見てから、面接を受けるかどうか決める(10の会社から6社を選ぶ)。面接を受けることを決めたら、ノック(演じる)して会話例の通りに面接する。面接が終わると、面接官は採用したいひとを一人選んで、理由をタスクシートに書く。求職者も一番気に入った会社を一つ選んで、理由を書く。三回目の授業の時に、二回目の授業の役割を交代する。

3.3 タスクのみの時間の配当

表1 タスクのみの時間の配当

時数		内容
1	40分 5分 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の会社のオリジナル求人広告をつくる。 ・会社の簡単な紹介をつくる。 ・面接質問を作る。
2, 3	50分, 50分	<ul style="list-style-type: none"> ・面接活動をする。

毎回、授業の最後に、学生に **feedback** としてのコメントを書かせている。学生の **feedback** から、タスクを中心とした授業では以下のことが考察できる。

利点

- ・学生の外国語学習への動機づけが高まる
- ・学生が考える機会が増える
- ・学生が、他の学生の発言から、異なる表現の仕方があることに気付く
- ・学生が同級生と知り合う機会が増える
- ・学生が、同級生と任務を完成させる体験ができる
- ・学生が、同じ文章を、異なる人との練習の中で繰り返すことによって、明確な記憶として残る
- ・学生が、英語の求人広告には詳細な労働条件が書かれていることに気付くなど、日本と海外でさまざまな違いがあることに気付く

課題

- ・教師が提供するサンプルの会話や、辞書に書いてある文章、自分が前もって準備した内容以外については、自分が正確な英語で発言できているか自信をもてず、会話が止まってしまう場合がある
- ・面接は学生自身がまだ経験していないことのため、状況を想像するのが難しい
- ・英語学習は英語を話す人と話す必要があり、タスクの練習は同級生との会話の機会しかない

まとめ・課題

大学に限らず、小学校から高校までの文部科学省の学習指導要領でも、日本の英語教育は学生の英語によるコミュニケーション能力の育成を非常に重視しており、教室で実際の生活上におこるコミュニケーションの場面をつくることを重視している。よってタスクに重点をおいたカリキュラム設計は学生の関心や興味をもとに作成されている。学生をアクティブ・ラーニングに参加させることで学習意欲は向上する。しかしタスクを設計するには以下のような課題がある。

- ・活動を設計するには学生がその活動の背景知識を有しているかに注意する。本稿で示した活動は大学1年生の前期に実施するものであり、学生は高校生活を終えたばかりで、仕事を探すことや面接についてはほとんど縁がなく、学生が実際の状況を想像することは難しい。1年生後期に実施するならば、学生の中にアルバイトを始めている者が増え、アルバイトをしていない学生も同級生から情報を得ているため、学生はかなり実際の日本語と英語の面接の違いを比較することができるようになる。
- ・学生の立場から考えると、自身が将来において不要な内容は興味を引きづらく、いろいろな業種の面接も、医学部など一部の専門性の高い学部の学生にとっては魅力のあるものとはなりにくい。
- ・学生に実際のコミュニケーションの場면을想像させるためには、活動をする前に時間を使って教室や学習環境を整える必要がある。例えば、教室の椅子と机が固定されている場合、環境づくりは難しいものとなる。
- ・学生が活動をする際、タスク自体に集中するあまり、事前に提示されたり、準備していた単語や文章だけでは対応しきれない場合がある。この場合、教師がそばにいなかったり、教師との時間が十分になかったりすると、学生は英語の正確性に不安を感じて活動が進まない場合がある。

わたしたち教員の立場としては生活に関連する活動を設計できるよう努力し、役に立つような場面設定ができるように工夫するのはもちろんだが、現在の大学の英語コミュニケーションの授業はほとんどが学生の人数が多いため、英語の力の差も激しく、教員はさまざまな異なる状況を考えてタスクを設計する必要がある。

以上、ここまで、英語の授業実践例をもとに、動機づけを向上させるためのタスクベースドアプローチの有用性と、アクティブ・ラーニングの効果を上げる取組について検討した。ここでは最後に、学生が教室外で自律的に学習することについて考えたい。

言語に大量に触れること（input）は言語習得の成功のカギであり、大量で質の高い言語接触（exposure）をすることによってのみ、学習者は話すことができ、書くことができる（output）レベルに達することができる。文部科学省は英語で発信するこ

とを強調しているが、それにはやはり言語への接触を重視する必要がある。しかし、教員が教室内でどれだけ努力しても、学生が教室内で過ごす時間には限りがある。よって究極的には、学生自身の自主学習と自律性が最大のカギとなる。教室内における外国語教師の最も重要な仕事は、授業をうまく進めるだけでなく、それぞれの学生によって向き不向きがあることを踏まえて、常に異なる授業外の英語学習方法を提供し続けることである。

4. おわりに

本稿では、タスクの完成をカリキュラムの中心におく方法がいかにより学生の学習への動機づけを高めるかについて、授業実践例をもとに検討した。ついで、その教育活動において注意すべきことを具体的に述べた。

どのような科目であっても、学生の学習意欲が高ければ、その学習効果は期待できる。英語学習も同様であり、英語で話すことができるかどうかは、英語を練習する環境が欠乏している日本の学生にとって、もっとも重要なのは意欲である。ただし、現在の日本の英語コミュニケーション能力への注目はとても大きいものであり、正規の英語教育以外でも、各大学が英語コミュニケーション能力を高めるためのプログラムを実施している。長崎大学を例にとると、もともとあった教養教育の英語授業以外に、環境科学部と経済学部は学生が選択可能な英語コミュニケーション授業を準備しており、CALL、3-STEP SYSTEM² や English Café³ など、学生の授業外学習において聞いたり話したりといった学習ができるようにしている。

本論文では、大学生の feedback や授業内の観察を通して学生の授業内への動機づけを分析したが、質問紙やアンケートを用いた実証的な分析は行えなかった。今後は、より学生の動機づけを高める授業を編み出すとともに、詳細な調査を行っていきたい。

註

-
- 1 文部科学省の 2008 年（平成 20 年）中学校学習指導要領解説（p.7）によれば、いわゆるコミュニケーション能力とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を身に付させるだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力を養うことを意味している。
 - 2 長崎大学の CALL 教室と e-learning の活用に関して、平成 24 年度後期から専任教員担当の総合英語においては、自律的学習者育成の観点から、e-learning 教材の学習成果を評価の一部に組み込んでいる。e-learning 教材は、千葉大学から導入した 3 Step システムとアルク教育社のパワーワークスを使用し、学習の成果や履歴を評価の 20%に加えている。
 - 3 長崎大学では、平成 24 年 12 月から週一回（90 分）、言語教育研究センターの英語教員（日本

人と外国人教員がともに) と、英語で話す場所を提供する English café を実施しており、長崎大学の学生ならば、誰でも参加できる。

参考書・文献

- 伊東治巳編、2008年、アウトプット重視の英語授業、教育出版。
- 高島英幸、2005年、文法項目別英語のタスク活動とタスク—— 34 の実践と評価、大修館書店、pp.3-4。
- 鳥飼玖美子、2011年、国際共通語としての英語、講談社。
- 松村昌紀、2012年、タスクを活用した英語授業のデザイン、大修館書店。
- 文部科学省、2001年、『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂。
- 文部科学省、2008年、小学校指導要領解説—外国語活動編、開隆堂。
- 文部科学省、2008年、中学校指導要領解説—外国語編、開隆堂。
- 文部科学省、2010年、高等学校指導要領解説—外国語編・英語編、開隆堂。
- Ellis, R. (2003). *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Dornyei, Z. & Ushioda, E. (2001). *Teaching and Researching Motivation*. 2nd edition. Harlow Pearson.
- Garner, R.C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitude and Motivation*. London: Edward Arnold.
- Gardner & W. Lambert (1972). *Attitude and Motivations in Second Language Learning*. MA: Newbury House.
- MacIntyre, P.D. (2007). Willingness to Communicate in the Second Language: Understanding the Decision to Speak as a Volitional Process, *The Modern Language Journal*, Vol. 91, No. 4, pp. 564-576.
- Nunan, D. (1989). *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge University Press.
- Nunan, D. (2003). *Research Methods in Language Learning*. 12th printing. Cambridge University Press.
- Nunan, D. (2004). *Task-Based Language Teaching*. Cambridge University Press.
- Willis, J. (1996). *A Framework of Task-Based Learning*. London: Addison Wesley Longman Limited.